

来るべきメシア

待降節第3主日A年

幼子となって世に来られた神様を、再び迎えるために、典礼はわたしたちの心を準備させてくれます。きょうは、来るべき方がどなたか、私たち自身がだれか、ということについて思いめぐらしてみましよう。第一朗読は、神からの慰めを伝えるイザヤの預言書です。この慰めは根本的なもので、悪を根から取り除こうとする慰めです。アダムとエバの樂園からの追放という譬えは、選ばれたイスラエルの民の罪の歴史となります。民の罪は自国からの追放をもたらし、神から約束の地として与えられた国と追放された国との間に、荒れ野が広がっています。荒れ野はその悲劇のシンボルです。イバラと雑草は不毛な土地を表し、イスラエルの民の不毛な生活を物語っています。彼らは母国を追放されて、そこを荒れ野にしてしまいました。

これは遠い昔の歴史上の出来事、というだけではありません。荒れ野という生活の不毛さをもたらした種は、私たちのうちに働き続ける罪深さを意味し、心と生活を不毛な荒れ野に変えようとするものです。一方、恵みによって自分自身の罪を認めるなら、それは、神からの大きな慰めの準備となります。イザヤ預言者が約束する神からの慰めは、神ご自身が来られ、内なる荒れ野は多くの実を結ぶ樂園に変えられます。つまり、神ご自身が人間を新しい心に変えてくださるということです。不自由な目の代わりによく見える新しい目、み言葉に開かれている新しい耳、それで新しい考え方、新しい感じ方、新しい生き方の可能性が与えられます。

新しい心は、ものを見る新しい観点、新しい地平を見いだすでしょう。神の民であるユダヤ人は、預言者を通してみ言葉を受け、守るべき尊い律法を受けました。そのように広げられた彼らの地平はさらに広がります。神のみ言葉が人間となって来られるからです。それに比べるなら、預言者の言葉も幼児のたどたどしい言葉のようなものです。しかも律法をいただいた民は、それを守らないばかりか、むしろ自らをおごる拠りどころとして、神の声に従いその命令を守るように促す、預言者たちに逆らったのです。

人間となったみ言葉は世に来られると、預言者の教えを変貌し、ものを見る新しい観点を与えられます。それは、民の生活の中にすでに入っていた大事な要素でしたが、占めるべきところに入っていなかったのです。その要素とは、信仰にほかなりません。人間とされた御子のおかげで、信仰が中心的な場を占めることとなります。信仰の役割とさえいえば、おもに二つのことが考えられます。一つは、アブラハムの時から、信仰は神の啓示という国に入るための唯一の門でした。モーセ、預言者、すべての民は信仰を持たずには入ることができませんでした。それだけではありません。信仰は、神そのもの、神が啓示なさるすべてが含まれます。もう一つ、神がご自分を啓示するために選ばれたのは、御子を私たちに遣わすことでした。信仰が私たちの心を住まいとするように、信仰の内容である御子が、私たちの心に住まわれます。私たちの命は、御子の命によって生かされるのです。聖パウロの言葉で言うなら、「私たちが生きるのではなく、キリストが私たちの内に生きるのです」（ガラ2・20）。このように、イザヤによって預言された神の慰めとは何であるかが明らかになります。つまり、不毛の荒れ野であった私たちの心は、神が住まわれる楽

園に変えられます。そうした慰めを運んでくださる幼きイエス様は、誕生に伴う恵みをいただけるように、私たちの心を準備させてくださるのです。

第二の朗読は、使徒ヤコブの手紙で、主が来られる時まで忍耐するように勧めています。もちろん、彼にとって「主が来られる」と言うのは、幼子イエス様の誕生のことを言っているわけではありません。主が再び来られる第二の到来、時の終わりのことを意味しています。このように、聖書は典礼を豊かなものにしてくれます。私たちは救い主の誕生の祝日を喜びのうちに待っています。それは、日々の困難に耐えるための励ましとなり、生きるということは神の命を生きることである、という信念のもとに、豊かな生活を送るよう勇気づけてくれます。またそうした生活と喜びは、希望に支えられます。その希望は、死んだのちに主に出会えるというだけでなく、生涯の終わりまで流れる時を満たす希望、主の再臨を待ち望む希望なのです。私たちに先だった兄弟たちは、その希望に生かされていました。イザヤ預言者は、幼きイエスの誕生という神からの慰めを預言しましたが、それはイエスの誕生の五世紀も前でした。イザヤの時代の人々はその希望によって、主の誕生を準備したのです。私たちもそのように、希望に生かされる者でありたいと思います。聖霊が私たちの心に植えつけてくださる希望によって、神の約束とその実現の間にある時を満たし、それを聖なるものとすることができますように。その希望によって私たちは、福音が日本の社会に受け入れられる機を熟させることができないでしょうか。

最後に、今日の福音に記されているように、時々、神の約束と私たちが望んでいる約束の実現との間に、痛ましい衝突を感じる場合があります。洗礼者ヨハネは、罪びとに対するメシアの怒りの現れを待っていたようです。しかし、メシアは、羊を慈しむ牧者の姿で現れ、罪びとを迎えて一緒に食事をし、罪の女と言われる人に触れられることを許し、徴税人をご自分の使徒とされました。主の道を準備するように悔い改めを呼びかけていた洗礼者ヨハネは、自分の描いていたメシア像と、神の憐れみを具現するイエスのメシア像の間であって、戸惑いました。この聖なる先駆者、ヨハネの取り次を願いましょう。神の約束と神が望まれる実現との間に、理解の妨げになりうるすべてのイメージを、自分の感受性から取り除いていただけますように。

J.E. Perez Valera S.J.